



Title	アメリカ兵がいた時代1945-1958 : 大阪国際空港周辺地域を中心に
Author(s)	西村, まりな; 松永, 健聖; 前川, 拓人
Citation	日本学報. 2019, 38, p. 38-52
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/85152
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【報告「学部学生による自主研究奨励事業」】

アメリカ兵がいた時代 1945-1958

—大阪国際空港周辺地域を中心に—

西村 まりな
松永 健聖
前川 拓人

はじめに

1945年8月14日のポツダム宣言受諾、翌15日の玉音放送、そして9月2日の戦艦ミズーリ号での降伏文書調印を経て日本は敗戦を迎えた。9月末には、大阪第二飛行場（現在の大阪国際空港）は和歌山県から兵庫県に進駐したアメリカ軍第6軍第33師団によって接收され、飛行場の名称は「Itami Air Base」へと変わり、アメリカ軍が駐屯することになった【『新修豊中市史』：522】。

このように、沖縄、奄美大島、小笠原諸島を除いて、日本では敗戦後、1952年のサンフランシスコ講和条約発効までの7年間、GHQによる占領統治が行われることになった。一般的にはこの期間を指して占領期と呼ぶが、Itami Air Baseには占領期が終わった後も1958年までアメリカ空軍や海兵隊が駐屯し使用し続けた。本論文で取り上げるのは、現在の大阪国際空港が「Itami Air Base」として存在した時期に関して、筆者らが新たに発掘した文献資料や、当時の基地周辺地域について知る人々への聞き取りをもとに調査した事柄である。これまでに公の記録に残らず、掘り起こされることのなかった人々の生活に着目し、占領期

やその後アメリカ軍が駐留した時期について重層的にとらえ直すことに本論文の主眼を置いた。

以下では、次のような章立てで論じたい。まず第1章では、占領期のItami Air Base周辺地域がどのような様相であったのかを概観する。続く第2章では、Itami Air Base周辺地域の生活の記録について、基地周辺に住んでいた子どもが書き残した文献資料等をもとに読み取っていく。最後の第3章では、当時の埴池地域について知る人々への聞き取り調査をもとに、文献資料との複合的な検討を試み、占領期研究の可能性について議論を展開したい¹。なお、本論文では、1945年から1958年までのアメリカ軍基地としての大阪国際空港を取り上げる場合には、Itami Air Baseの呼称を用いることとする。

1. 占領下のItami Air Base周辺地域

本章は、Itami Air Base周辺地域が占領期にどのような様相を呈していたのかを、聞き取り調査や一次資料をもとに明らかにすることで、第2章と第3章における議論の土台を作ることとしている。第1節では、現在の大阪大学刀根山寮の場所に建てられていた刀根山ハウスという占領軍将校の家族用住宅（ディペンデントハウス）

について論じることで、占領期の大阪大学豊中キャンパス周辺地域がどのような空間の中に置かれていたのかを考察したい(図1参照)。第2節では、占領が解除された直後の1952年6月に発生した吹田事件について触れることで、当時「反共の防波堤」とされた日本がどのような様相であったのかを、Itami Air Base 周辺地域に焦点を当てて考えてみたい。第3節では、空港周辺の占領軍によるジープ事故に関する一次資料を地図化することで、Itami Air Base 周辺地域における占領軍の動線を明らかにし、次章以降の議論の土台としたい。

(1) 刀根山ハウスをめぐる人々の記憶

本節では、刀根山ハウスに話を進める前に戦後の大阪大学の歴史について簡単に触れておきたい。日本が敗戦を迎えた4年後の1949年、大阪帝国大学は旧制浪速高等学校などを吸収する形で新制大阪大学となった。本部は大阪帝大の時代と同じく中之島に置かれたが、旧制浪速高等学校を統合した豊中キャンパスには、一般教養課程のほか、大学開校以来初めて文系学部が設置された。占領期には、大学を始め全国の多くの公的施設が占領軍による接収を受けたが、大阪大学自体は大方アメリカ軍の接収を免れた。豊中キャンパス周辺では、キャンパスから南西方向に広がる林が接収され、刀根山ハウスと呼ばれる占領軍将校の家族用住宅が新設された(図2,3参照)。1948年に建設され58年まで接収されていた刀根山ハウスは、接収解除後に大阪大学へ譲渡され、建物の一部は1980年まで刀根山寮として使用されてきた。しかし、老朽化に伴う建て替えとともに建物は壊され、現在では占領期を物語る建造物は残されておらず、一次資料もほとんど現存しない。以下では、この刀根山ハウスをめぐる人々の記憶について聞き取り調査の内容を見ていくことで、当時の大阪大学周辺地域がどのような空間の中に置かれていたのか考察したい。

米ソ対立が決定的なものとなった1948年、現在の刀根山寮がある山の斜面に刀根山ハウスは

建設された。当時、日本に進駐していた占領軍は、その階級に応じて住み分けを行っていた。中でも将校の家族用住宅として建てられた刀根山ハウスは、ディペンデントハウスという部類に含まれた。小泉他[1999]によると、ディペンデントハウスは占領軍による短期間での建設要求に対応するために、全国統一規格のもとで全9タイプの建物を組み合わせる形で建設されたという[小泉他1999:79]。アメリカ本国と比べると決して高級な作りの家ではなかったが、ディペンデントハウスには家具や電化製品なども備え付けられ、戦後すぐの日本人の暮らしとは比較にならないほど優雅な生活が営まれていた。1952年から半年間刀根山ハウスに居住していたA(アメリカ人男性、1942年生まれ)によると、「家は小さかったが、洋風で家具が揃っていた」という。

刀根山ハウスに居住した将校たちは、同じく占領軍によって接収されていたItami Air Baseに勤務していたのだが、ここで少しItami Air Baseについて触れておこう。占領当初、Itami Air Baseにはアメリカ軍が駐屯していたが、朝鮮戦争が勃発すると戦争の前線基地として使用されるため、海兵隊も駐屯することとなった。例えば1952年暮れから1954年9月まで駐留したB(アメリカ人男性、1934年生まれ)は、海兵隊の航空管制官として勤務していたという。

Itami Air Baseに進駐する兵士の数が増えると、地元の経済が発展する一方で、地元住民と兵士たちが直接的に接触する場面が増え、基地周辺でトラブルが発生することもあった。そのことについて具体的には次章以降で述べることにして、ここでは話を一旦刀根山ハウスに戻し、豊中キャンパス周辺地域に住む人々の記憶を頼りに刀根山ハウスの実態に迫ってみたい。

地元住民の方の中で、刀根山ハウスに関する記憶として最も多く挙げられたのは色に関するものであった。例えばそれは、「赤の屋根、ベージュの壁、緑の芝生」と形容されるように、人々の記憶の中に鮮明に残っている。今回の調査では残念ながら刀根山ハウスのカラー写真を見つけることはできなかったが、聞き取り調査をさせてい

ただいた A の姉(1939年生まれ)が描いた絵を見ていると、白壁に赤屋根の刀根山ハウスを見ることができる(図4参照)。

また、当時刀根山ハウスは日本人立ち入り禁止であり、周囲には鉄条網が張り巡らされていた。たとえ相手が小学生であっても、敷地内に入ることは許されていなかったのである。

しかし一方で、山田博治(男性、1947年生まれ)は、アメリカ軍の通訳をしている知人の紹介で、一度刀根山ハウスのアメリカ人家族に招待されたことがあるという⁵。そのアメリカ人家族は、家の中を紹介しながら男性に物珍しい生活用品を見せて回った。その一つが掃除機である。彼らは掃除機でものを吸うところを見せた後に、男性の手を掃除機の吸引口に持っていったという。もちろん、アメリカ人家族はこの男性をただからかおうとしただけであろう。しかしながら、掃除機など見たこともなかった男性にとれば、ものが吹々に吸い取られていく掃除機を手当てられ、もしや自分の手までも吸い取られて無くなるのではないかと非常に驚いたと語っていた。

ここまで、地元住民に対する聞き取りから得られた証言を紹介した。もちろん、上に挙げたような経験は、地域住民の多くに共有されている体験でも、市史などの公的な記録に残っているものでもない。しかしながら、聞き取りを通して得られたこれらの経験は、占領期という空間が決して一様なものではなかったことを改めて示しているのだ。

次節では、占領が解除された直後の1952年6月に大阪大学豊中キャンパスを起点に起こった吹田事件について見ていくことで占領期の時代的特徴をつかむとともに、米ソ対立から朝鮮戦争へと続く時代の中で占領政策が転換されていった様子を見ていきたい。

(2)吹田事件と朝鮮戦争

日本における占領は、1952年4月のサンフランシスコ講和条約発効により終結した。しかし、当時は朝鮮戦争下であり、Itami Air Base を始めと

する全国数多くの占領軍施設は朝鮮半島出撃の前線基地として引き続き使用されることになった。吹田事件は1952年6月にそのような状況下で起こった。以下では『新修豊中市史』より、吹田事件のあらましを見てみたい。

昭和27年(筆者注:1952年)6月25日は朝鮮戦争勃発2周年にあたるが、同日未明に発生したのが吹田事件で、事件は豊中市内のこうした動き(筆者注:米軍基地拡張反対運動)を背景にして起こった。前日の6月24日、午後6時ごろから待兼山の大阪大学北校グラウンドでは大阪府学生自治会連合(府学連)主催の集会「伊丹基地粉碎、反戦・独立の夕」が1000人規模で開かれ、多数の在日朝鮮人を含む労働者・学生が集まった。集会後、デモ隊は二手に分かれて国鉄吹田操車場へ向かい山田村で合流して吹田操車場構内に入るが、国鉄吹田駅で警官隊と衝突した。警官が発砲し、デモ隊は火炎瓶で応酬した後、一部が逮捕され、その後の裁判では刑法の「騒擾罪」適用の可否が注目されることとなった(昭和47年、騒擾罪は無罪が確定)。(『新修豊中市史』:631)

図5は、『大阪大学50年史』に収録されている吹田事件に参加した学生の写真である。学生を含むデモ参加者たちは、集会終了後に阪急電車に特別列車を走らせることを要求。服部駅で下車し、暗闇の中徒歩で吹田操車場を目指した。デモ参加者らは一体なぜ、石橋から遠く離れた吹田操車場を目指したのだろうか。それは、当時吹田操車場が朝鮮半島への武器輸送の拠点とみなされており、武器を輸送する列車の運行を止めることがデモの最終的な目標とされたからである。

朝鮮戦争が始まって以降、朝鮮へ出兵するアメリカ軍の前線基地であった Itami Air Base や宿舎の刀根山ハウスは、当時軍事路線を取っていた日本共産党が攻撃目標としていた。刀根山ハウスに住んでいた A は、「日本はとても安全だったが、共産主義者による騒動がたまにあり、それだけが

心配であった」と当時を振り返っている。一方、西村 [2004] は、吹田事件の計画に関わった日本共産党大阪大学細胞キャップの秦政明から、「いや、だから囧というか、陽動作戦だったんですよ。イタミ・エアベースとか刀根山ハウスは」という証言を得ている [西村 2004:38]。どちらが真実であるかは今のところ断定できないが、Itami Air Base と刀根山ハウスの存在が吹田事件と密接に関わっていることは間違いないであろう。

このように、朝鮮戦争以降、Itami Air Base 周辺には緊迫した空気が流れていたが、これと同時に Itami Air Base で起こっていたのが米軍基地拡張反対運動である。本井 [2015] によると、1951年から52年にかけて起こった Itami Air Base 拡張の動きは、地元の反発を招くこととなった。周辺3市（豊中市、池田市、伊丹市）で結成された伊丹飛行場拡張反対期成同盟会や労働組合、農民組合などの動きかけもあり、1952年の夏には拡張中止の旨が決定されたのである [本井 2015:6-7]。このように、占領終結前後の Itami Air Base は、社会的に大きく揺れていた。朝鮮戦争により規定された「占領」という構造は、依然として周辺地域の人々に大きな影響を与え続けていたのである。

次節では、占領軍によるジープ事故の発生現場を地図化することで、1節2節で見てきた Itami Air Base 周辺地域の占領経験を空間として捉え、次章以降の議論につなげたい。

(3) 「進駐軍事故見舞金支給申請書綴」と占領軍の

動線

ここまで Itami Air Base 周辺地域を中心に、占領下における街の様子を見てきた。最終節である本節では、大阪府立公文書館所蔵の「進駐軍事故見舞金支給申請書綴」を手がかりに占領軍の動線を確認し、前節までとのつながりを確認したい。

西川 [2017] は、京都における「進駐軍事故見舞金支給申請書綴」をもとに占領期における占領軍関連の事故がどこで起こったのかを地図化し

た。図6は、Itami Air Base 周辺地域（ここでは、資料のあった豊中市と池田市を指す）における事故現場を、西川の作業を参考に筆者がマッピングしたものである。

「進駐軍事故見舞金支給申請書綴」とは、占領期に発生したアメリカ軍による事故（死亡・障害など）に対する見舞金を、占領後に補償するために作成されたものである。申請書綴を見ていると、当時はアメリカ軍のジープが速度を超過して走行することが多く、道を歩いていた住民を轢くという事故が多かったことがわかる。

大阪府立公文書館に現存する綴りは計3冊で、すべて1953年の作成となっている。この3冊の綴りの中には、事故現場が豊中市か池田市のもの11件含まれている。ここでは、記載されている事故現場の地番を現在の住所に置き直して地図化した。なお、11件のうち1件は、当時の地番表に記載されていなかった（おそらく、申請書綴が誤って記入されていると考えられる）、残りの10件について分析をおこなった。

はじめに事故が発生した時期区分について見てみよう。1945年から47年が4件、1948年から49年が3件、1950年から52年が3件となっている。先ほども述べた通り、刀根山ハウスの建設や海兵隊の駐留が1948年以降のことであるから、Itami Air Base 周辺地域でのジープ事故は駐留する兵力の拡大とは相関関係があるとは必ずしも言えない（もちろん、これは交通事故のみの話である）。

次に事故発生現場について見てみよう。先ほどの事故発生時期には大きな特徴が読み取れなかったが（強いて挙げるとすれば、どの時期にも満遍なく事故が発生しているということであろうか）、事故発生現場に関しては、かなり大きな特徴がとらえられるだろう。まず発生現場として多いのが破線で囲んだ Itami Air Base の周辺である。次に特徴的なのが、左上から右下にかけて直線で結んだ産業道路（現在の国道176号線）上である。道路上だけで5件の事故が発生している。これは、産業道路が当時の占領軍にとって重要で頻りに往来したルートであったということなのではな

いだらうか。この産業道路を北に進んでいくと当時接収住宅のあった宝塚の方面に、南に進んでいくと大阪市内につながる。つまり、Itami Air Baseとの往来に産業道路は頻りに利用されたと言えるだろう。さらに、時代が進むにつれて空港周辺から離れた場所でも事故が発生していることもわかる。もっとも、報告されている事故件数が少ないため断定することはできないが、朝鮮戦争が始まると、他の基地などとの往来が増加し、基地周辺以外でも事故が発生するようになったと考えることができるのではないだろうか。

ここまで、第1節では刀根山ハウスを、第2節では吹田事件を取り上げることで、占領下における大阪国際空港周辺地域の様相を明らかにしてきた。また、第3節では、占領軍の動線を地区化することで、往来の状況を明らかにするとともに、前節を受けて、朝鮮戦争勃発以降に占領軍の動線が拡大した可能性を示唆した。

次章では、さらに一次資料を掘り下げていく中で、Itami Air Base 周辺地域における人々の生活史をたどりたい。

2. Itami Air Base 周辺地域を文献資料から読み解く—「基地の子」が書き残した体験を中心に—

本章では、前章の内容を受け、基地周辺地域に住んでいた人々が記述した文献からその周辺の様相をみていきたい。また、次章で取り上げる聞き取り調査の対象が、主に基地周辺に住む子ども、すなわち「基地の子」に該当した人たちであることから、本章では特にそのような子どもに関する文献資料を中心に分析を試みたい。

まず第1節では、1954年2月の『豊中市政だより』に掲載された、豊中地区の子どもとアメリカン・スクールの子どもたちの交歓会の感想文に着目する。第2節では、基地周辺に生きる子どもたちがみた「パンパン」と呼ばれた女性たちについて、1953年に蛸池小学校PTAが行った調査や子どもの作文をもとに、当時の彼女たちへのまなざ

しを検討する。そして第3節では、アメリカ軍の軍用機の離着陸が引き起こす騒音に対し、近隣の小学校関係者が訴えていた被害の声をみていく。

(1)「基地の子」とトネヤマ・スクール

トネヤマ・スクールとは、Itami Air Base のアメリカ軍将校の子が通ったアメリカン・スクールである。トネヤマ・スクールについては『豊中市史』や『新修豊中市史』に少し記述がある程度で、その実態についてはほとんどわかっていないが、豊中市の小中学校との間で交歓会が行われたことが1954年2月5日の『豊中市政だより』に記録されている⁵⁾。蛸池小学校、桜井谷小学校、上野小学校、克明小学校、桜塚小学校、豊中第二中学校、豊中第五中学校の児童生徒56名が、映画鑑賞、互いの授業参観、スポーツなどを通して半日間交流したという。

当該記事には、交歓会に参加した小学2年生の女子児童の感想文が掲載されている。交歓会終了後間もなくして書かれた文章という点で、そのときの様子を浮かび上がらせる貴重な資料といえよう。当日の様子は彼女の目にどのように映ったのだろうか。

學校から先生につれられて、十五人のお友だちと、アメリカン・スクールを見に行きました。とよ中の駅から、ほかの學校の人もいっしょに、アメリカのバスにのりました。バスは青色をしたちょっとかわったバスでした。

まもなくバスは高いところにある、赤いやねのアメリカの學校につきました。アメリカの子どもはどんなのかしらん、と思いながら學校に入っていましたら、青い目や、ちゃ色の毛をした、よくにたかおの人ばかりで、みんなえいごではなしているの、なにをいっているのか、さっぱりわかりませんでした。

そしてその人たちは、みみわやうでわや首かざりをして、ふくはうすいふくや、半そでのふくをきていました。いまごろでもあんなうすぎをして、さむくないのかしらとびっく

りました。一ばんはじめに、アメリカの人とみんないっしょにえいがを見ました。えいがのだけは、わたしにはわかりませんでした。それがすんだらまたみんなで手をつないで、うんどうじょうに出てねこねずみのあそびをしました。アメリカの人も「キャア、キャア」といってとてもおもしろいでした（筆者注：ママ）。あそびどうぐもかわったものがたくさんありました。つぎは、おべんきょうのじかんでまたアメリカの人と手をつないで仲よく二人ずつ、つくえにらんでおべんきょうをしました。

この学校では、いつも一年生と二年生が、いっしょに同じきょうしつでおべんきょうをしているそうです。一年生と二年生で、二十五人くらいの方でした。おべんきょうのとき、はじめにアメリカの校長先生がなにかをせつめいしておられましたけど、ことばがわかりませんので、どうするのかわかりませんでしたけれど、えいごを日本語でおしえてくださったのでやっとわかりました。

アメリカ人の人がわたしたちのえを見てなにかいっていましたがわかりませんでした。ことばがわかればおはなしができるのになあと思いました。

さいごにこうどうで学び会がありました。日本の人のバレエやおどりやうたやピアノ、そしてアメリカの人のダンス、ピアノ、アコウデオンがあってにぎやかでした。日本の人のおどりのときは、とてもたくさんはくしゅがありました。アメリカの人は、ダンスは大へんじょうずでしたけれど、ピアノをひくのはわたしたちのお友だちの方がじょうずのように思いました。こうどうは、あまり大きいことはなかったけれど、こうどうのつくえはひじをつくようになってべんりでした。おべんじょもかわっていますので、はじめはわかりませんでしたからこまっていますたら、六年生の方がこしをかけてするようにとおしえてくださいました。うんどうじょうやおきょうしつにはごみがちっともあり

ませんでした。そしてどのおへやもあたたかくしてありました。アメリカの人もこちらの学校に来てなかくしたらよいのになあと、思いながら四時ごろアメリカのバスでかえりました。

まず、この感想文には女兒が見聞きしたことが時系列に沿って具体的に描かれていることから、当日のプログラムの内容についておおよそ見当がつく。映画鑑賞、運動場での遊戯、教室での学習や絵描き、講堂での学芸会と、トネヤマ・スクール内を移動しながらトネヤマ・スクールの子どもと交流する機会が設けられたと考えられよう。

また、アメリカの子どもや校長先生が話す英語の発話に対し、この女兒は「ことばがわからない」と繰り返しつつも、「ことばがわかればおはなしができるのになあ」「アメリカの人もこちらの学校に来てなかくしたらよいのになあ」と述べていることから、交歓会のなかでトネヤマ・スクールの子どもに親しみを覚え、コミュニケーションをとりたいと願う気持ちを読み取ることができる。他方で、見馴れない「アメリカの人」の容貌に驚く様子や、洋式便所の仕様に戸惑う様子も伝わってくる。

さらに、この感想文には、資料がほとんど残っていないトネヤマ・スクールの外観や内装について知るための手がかりも記されている。まず、トネヤマ・スクールの外観について、前章で触れた「刀根山ハウス」同様、赤い屋根が特徴的であったことが伺える。また、「高いところ」にあったと記述されているが、この点に関してはトネヤマ・スクールが刀根山ハウス群と同じ待兼山の敷地内に所在していたことがわかる配置図が残っていることから裏付けられる。さらに、暖房設備や洋式便所が備わっていて、女兒にとってそれが普段の生活のなかで出会うものではなかったことが読み取れる。

なお、交歓会は二度目の開催が予定されていると記されているが、その後の『豊中市政だより』では記事として扱われていない。また、豊中地区の子どもたちがどのように呼び集められたのか、

だれが通訳をしたのか、「青色をしたちょっとかわったバス」とは通学バスのことなのか、などこの記事だけでは判然としない点も多い。しかしながら少なくとも、豊中地区の一部の子どもとトネヤマ・スクールの子どもが同じ場所とともに時を過ごす機会が設けられたこと、そこが豊中地区の子どもにとって普段の生活では馴染みの薄い異文化に出会う場所となったことが明らかとなる。

(2)「基地の子」と「バンバン」

1953年に発行された『基地の子』という児童作文集にも、豊中の子どもが書いた文章が収録されている。『基地の子』は、編者らが日本教職員組合や全国の新聞社の協力のもと基地周辺の小中学校から収集した「基地の生活の現実」に関する作文のうち、編者らの審査によって選抜されたものが収録された。そのような背景を念頭に置きつつ、豊中市の小学校2年生の男子の作文を見てみよう。

ぼくとこのいへはバンバンゴヤです。よるはやかましくてねむれません。あっちのほうから、らじおがきこえてきます。バンバンは、しんちゅうぐんとだきつきます。ぼくはあんなのきらいやおもいます。ぼくとこのものおきからみていると、にかいのバンバンとしんちゅうぐんときっすしています。ちょっとしてから、バンバンがぼくとこへきて、ちんちんがいたいといいました。

ぼくとこがくすりをあげました。そのことは、おとうさんやおかあさんに、ひとつも、ゆうていません。

また、ぼくがものおきへいって、バンバンとするのをみていました。バンバンはくすりをつけて、ちんちんにぬりました。

それを見て、ぼくはいややなどおもいました。そのひとは、もうくびになりました。そのへやへ、まただれかきています。もう一つのへやには、よし子さんというひとがきています。そのひとはごはんようたべます。ぼく

はそんなんすんのん、いややなあとおもいません。〔清水他編 1953:160〕

一般的に「バンバン」とは、「性的サービスを有償で行なう売春婦、いわゆる街娼（街角に立って客引きをする娼婦）」〔茶園 2014:11〕に対する侮蔑的な意味を含んだ呼称であり、「バンバンゴヤ（以下、バンバンハウス）」とは行為を行う置屋のことを指す。主に民家の一部を「間貸し」とするという形式で、女性たちとアメリカ軍が出会う空間がつくられていた。

この作文からはこの男児がどの小学校に通っていたかまでは特定できないが、家が「バンバンハウス」として間貸しを行っており、「バンバン」の女性が入れ替わりで仕事をしていたことがわかる。

聞き取り調査の中でも、生家の隣の民家が「バンバンハウス」だったという人がいた。Y.K（男性、1946年生まれ）は、客引き役の、いわゆる「やり手婆」の様相を強烈に覚えている。実際にそこでアメリカ軍相手に性商売をするのが20代から30代くらいの洋装の女性だったのに対し、「やり手婆」は50代くらいの女性で、いつも髪を結び上げ、着物を着ていた。妖怪漫画に出てくるような見た目に思われ、はっきりと覚えているのだという。その女性は、特にアメリカ兵に声をかけるでもなく、あらかじめその場所を知っていて訪れるアメリカ兵を、置屋の中に案内するという役割をしていた。Y.Kは「バンバン」の女性よりもむしろその客引きの女性のほうを強烈な風貌とともに記憶している。

1953年度の蛍池小学校PTAの調査によると、当時蛍池小学校児童家庭のなかにも置屋が46軒あり、そこで働くバンバンの数は127人にも及んだ〔大阪軍事基地反対懇談会事務局、関西軍事基地反対連絡協議会事務局共編 1954:中の9〕。また、大阪平和を守る会豊中支部連合会〔1963〕によると、「テキサス通り」には娼婦たちが徘徊し、夜の街路上、白昼ジープの中、夏は外から見える部屋の中でも性行為が行われていた。蛍池小学校の校内においても、校舎の軒下や講堂内、机の周

辺にも毎朝のように「常軌をいった行為の痕跡」が発見されたという【大阪平和を守る会豊中支部連合会 1963：2】。

このように、「基地の子」たちの生活圏内に「バンバン」たちや「バンバンハウス」は存在し、地域の大人たちは彼女たちを「風紀を乱す存在」として問題化した。しかし、茶園【2014】が指摘するように、彼女たちは、彼女たちをまなざす者によってこそ「バンバン」という呼称に切り縮められ、彼女たちひとりひとりの抱える問題が不可視化された状態で現代にまで至っている。前出の蛭池小学校地区における「バンバンハウス」の調査や、作文集「基地の子」の編纂という過程においても、「バンバン」を子どもに悪影響を与える存在として一括りにし取り締まるというPTAの立場が、彼女たち個人の生や主体性、彼女たちが「バンバン」として生きざるを得なかった社会背景などを消し去ってしまうという点で、同様のことがいえるだろう。

このように、「バンバン」や「バンバンハウス」は「基地の子」にとって身近な場所に存在しえたということが子どもの作文や当時の調査、聞き取りなどからわかる。また、それに対する記述や記憶はさまざまであるなかで、「バンバン」の女性たちは、その一人一人の人生の生々しさが排除された形で一様に取り締まれたという点を省みると、当時の一次資料を批判的に読み解いていく必要があると考える。

(3)アメリカ軍用機の離着陸音による騒音問題

前述の風紀問題と併せて当時のPTAが問題視しているのが、Itami Air Baseに離着陸するジェット機やヘリコプターの騒音問題である。

当該地域における騒音問題に関しては、本井【2015】が法整備の展開とともに論じている。学校現場からの被害の報告を受け、伊丹市と豊中市の当局・議会・PTAは関係各省市に対し防音対策や移転費用の交付を求めており、1953年11月に特別損害補償法が改定されたことで補償対象が学校施設にまで拡大された。これにより、伊丹市

の神津小学校の改築や蛭池小学校の防音工事が認可されたという【本井 2015：9】。

当時の資料のなかには、特に軍事基地反対運動の文脈から、軍用機の離着陸が学校教育現場に及ぼす影響について示す児童や保護者の声が多数記録されている。

まず、蛭池小学校については、以下のように報告されている。

ジェット機とヘリコプターの離着陸は年間毎日昼夜間断なく校舎上空を幾回も旋回しての低空飛行訓練を行うため校舎は振動し、教師、児童の問答は中止されて学習は一時停止状態になる。又二回も近辺に飛行機がつい落爆発している。【大阪軍事基地反対懇談会事務局、関西軍事基地反対連絡協議会事務局 共編 1954：中の12】

ここからは、飛行訓練による揺れや爆音は日常的に授業が中断されてしまうほどの大きさがあったことが読み取れる。

さらに、池田市の小学校2年生の児童の感想文には、「ひこうきがよくとびます。ぼくのいえのやねのうえをすれすれにとんでいくみたいです。ぼくのあたまのうえも、すれすれにとんでいくみたいです。／なぜこんなにぎょうさんのひこうきかとぶのやふしぎです」【同前：中の2】と書かれ、幾多の飛行機が低空飛行を行っていたのを目の当たりにしていたことがわかる。「ぶんぶんぶんぶん飛んで、やかましくてしょうがない。勉強していても、先生のことばが、きれぎれになるので、いらいらしてくる」、「せつかく算数のもん題を考えているのに、ジェットの音が出すと、むちゃくちゃになってしまう」、「ジェット機が飛ばなかったら、ぼくらはもっともっと勉強ができるのになあ」といった子どもたちの言葉を受け、なんとかしなければならぬという思いを抱いたPTAの手記も残っている【猪俣他編 1953：150】。

また、学校教員側の意見も紹介されている。

音楽の先生は、この爆音騒音の影響からか、ここの学校の子どもの音楽的な情操が、だんだん低下して行くことを指摘し始めた。

低学年の先生は、この平気そうな子どもの顔に将来の不安を見つけ出した。生まれ落ちた時から、この爆音の中に育ってきた子どもが、このまま、それが宛も当然のこのように思って、成長して行く姿に、目に見えないところで、侵されていく何者かがあるのではないかという不安をもち始めたのである。それは、街の大人たちの場合と同じである。けれども、それが、子どもであるだけ、考えさせられるのである。

大人は、平和で静かな伊丹の街を知っている。——けれども、子どもたちには、伊丹は、軍都伊丹だけでしかない。ジェット機のすれすれに飛びかう爆音と、外国の自動車の疾走する伊丹しか知らないのだ。[同前：149]

この文章からは、子どもたちが幼いころから爆音の轟く環境で育っていきことが知らないうちに心身に悪影響を及ぼすのではないかという教員の不安が読み取られるだろう。

このように、児童たちが直接被害を訴えるだけでなくとどまらず、PTA が子どもたちの生活環境を懸念し、声を上げていたことがわかる。これらの声が収録された『基地日本』は、まさにそのような背景のもと編纂されたのであった [同前：1]。

以上、本章全体を通して、Itami Air Base 周辺地域に住んでいた「基地の子」を中心に書かれた記録から当時の様相をみてきた。第1節では、トネヤマ・スクールの子どものとの交歓会に参加した豊中の女兒の感想文から、当日の具体的な交流の様子を読み取り、さらにトネヤマ・スクールの外観や設備に関する断片的な情報を得ることができた。第2節では、豊中に住む子どもの作文やPTA による調査史料から、「基地の子」の生活空間にも存在した「バンバン」の女性たちについて、先行研究を参照しつつ彼女たちに向けられた批判的なまなざしを検討した。そして第3節では、

Itami Air Base 周辺地域の小学校では、学校現場が基地から受けた直接的な騒音問題に対し、行政的な措置がとられるまでに子どもやPTA がどのような被害を訴えていたのかを明らかにした。

続く第3章では、聞き取り調査で明らかとなった当該地域住民たちの体験から、Itami Air Base の設置が個人にどのように影響を及ぼしたのか具体的にみていきたい。

3. Itami Air Base 周辺地域住民の体験 —聞き取り調査を中心に—

本章では、1945年から1958年までの間にItami Air Base 周辺で生活した経験を持つ人々への聞き取り調査から、彼らの記憶の中の「アメリカ軍がいた時代」を記述し、占領期研究における聞き取りという手段の可能性を探りたい。まず第1節では、主に小学生の頃に「アメリカ軍がいた時代」を経験した人への聞き取りから、「基地の子」たちの遊び場を中心としたアメリカ兵との接触などについてみていく。そして第2節では、主に10代の頃に「アメリカ軍がいた時代」を過ごした人への聞き取りを中心に同様の作業を行い、今回の調査で見えてきた聞き取りが持つ意義や可能性についても検討したい。

(1) 「基地の子」たちの「進駐軍」の記憶

子どもたちはアメリカ軍のことを「進駐軍」と呼んでいた。「基地の子」たちにとって、「進駐軍」をはじめとする占領の記憶は、彼らの遊びの場面と結びついて記憶されている。

まず、子どもだからこそ成し得た占領にまつわる体験のひとつに、基地内のプールの使用が挙げられる。遅くとも1956年ごろには、夏になると、地域の子どもたちが飛行場の中のプールで遊ぶことができた。それでも、立ち入りが許されるのは特別な木の鑑札を持った子どもだけで、Itami Air Base の入口でMP (憲兵) に札を見せるとゲートを通ることができた。少なくとも

筆者らが話を伺った範囲では、木の艦札がどのようにして手に入ったのかについて、はっきりと覚えている人はいない。地域の名望家が小学生たちに取り計らってくれたのかもしれない、と憶測する人もいたが、詳しい経緯は不明である。小学6年生でようやく背の立つほど深いプールで、毎年夏になると艦札を持った友人たちと遊びに行くのが恒例だったという¹⁾。

また、基地周辺では、ふだん日本では味わえないような料理との出会いがあった。O. Y (男性、1945年生まれ)は、付近で食べたハンバーガーの味が忘れられず、今なおこれを一番おいしいハンバーガーとして記憶している。コカ・コーラを飲んだのも、その頃が初めてであった²⁾。

空港のゲートから阪急蛍池駅に向かっては、「テキサス通り」が形成された。現在では「空港通り」という名称で知られているが、占領期の様相を物語る建造物は残っていない。当時、空港周辺には一面に田園風景が広がっていたが、「テキサス通り」はコンクリートで舗装され、英語表記の看板を掲げる店々が立ち並んだ。そこにはアメリカ軍を相手にするバーやキャバレー、雑貨や衣料品店がひしめいていた。O. Yは、白い服を来た2人のMPが、一日に数度、歩幅をそろえて行進しながらパトロールを行っていたのを憧れの感情とともに覚えている。2人の行進はあまりに統率が取れていて、いつもその美しさに見入ってしまったという。

ほかに、アメリカ軍の将校家族が自宅の近隣に住むようになったことでアメリカの文化にふれたという人もいた。M. K (男性、1944年生まれ)は、1954年ごろに近隣に越してきた将校家族にまつわる2つのエピソードを覚えている³⁾。その将校家族は男性と、その妻と、3歳くらいの娘の3人家族であった。

夏のある昼、金網越しに将校家庭の庭を覗いたときのことであった。ぼうっと眺めていると、女性(将校の妻)が家から庭に出て、寝転んでいる様子が見えた。間もなくしてM. Kは、その女性が裸であることに気づいた。びっくりして、家の中に戻り、自分の家族に「奥さんが裸で寝転んで

いた」と報告した。そのとき初めて「日光浴」という慣習を知った。

もうひとつ、時期は定かではないが、ある日、女の子(将校の娘)が自分に必死に言葉投げかけてきた。今思い返せば「ママ、ハッピーバースデー」と言っていたのだろうが、そのときは「ママ」に何かが起こったのだろうということしか予測できなかった。しばらく経つと、ヘリコプターが低空飛行で家の上空までやって来た。そして機体から白い物を落とす。奥さんが家から出て来て、喜んでいる様子を見せ、機内から将校の男性が挨拶をするそぶりを確認した。そこでようやく、「ママ」が誕生日を迎えたことに女の子がはしゃいでいたということ、また、男性がプレゼントを落としたのだということを理解したのだった。

当時の小学生男子たちの主な遊び場は、山や池であった。南山芳一(男性、1945年生まれ)は金坂池(現在の阪大豊中キャンパス西隣りにある池)で釣りをしたときに、MPに注意された経験を持つ。しかしその後も懲りることなく釣りをして遊んでいた⁴⁾。

スリルに満ちた体験をした人もいた。前出のM. Kは1955年ごろのある日、仲間とともに待兼山から東へ続く竹林に入ると、こんもりとした土の隆起を見つけた。普段から遊んでいた遊び場の様子が前日までとは違うため不思議に思って近づいてみると、その下に何か埋められていることに気づいた。仲間とともに掘り返すと木箱がみつかり、その中には 그리스に浸された鉄砲が1段あたり6丁、それが3段積み重ねられていた。恐ろしくなって、石橋の交番に通報しに行くと、MPと連れだって警察がやって来て、M. Kは鉄砲の発見者として事情聴取を受けることとなった。

Itami Air Baseの接收が解除された後は、「テキサス通り」からも多くの店が撤退し、次々に空き家が増えていった。そのような空き家もまた子どもたちにとっては遊び場の一つであった。O. Yは、屋根の上に登ると、征服感が得られたという。このように、「遊び」の体験は、同世代の仲間とともに一時的に行うものであり、その時々で偶然的なものとなる。

その一方で、何気なく送る毎日に当たり前のように染みついた光景の中にも、アメリカ軍がいた時期ならではの光景があったといえよう。例えば、M. K は、小学生の間、実家最寄りの阪急桜井駅から克明小学校最寄りの阪急岡町駅まで電車で「越境通学」をしており、毎朝、石橋駅から蛍池駅に近づくとき東側には刀根山ハウス群が望んだ。日本ではないと思わせるような光景で、夕方の帰宅時には同じ景色が夕日に映えて一段と美しく見えたという。

(2) 「アメリカ軍がいた時代」の記憶を語る

本節では、当時青年期だった人々の体験を取り扱う。筆者らはC(女性、1925年生まれ)と森井正次(男性、1937年生まれ)の二人に聞き取り調査を行った¹⁵。最初にCの体験から紹介したい。

Cは、戦中は茨木市に住んでおり、自転車で基地のある伊丹まで通っていたこともあった。彼女が占領期に印象に残っている経験は大きく2つある。一つはItami Air base内に入ったこと、もう一つはアメリカ軍関係者のみが入店を許されたバーに入り、プロレスを鑑賞したことである。それぞれの経験を詳細にみていきたい。

まず、前者の基地内に入ったという経験についてである。当時Itami Air Baseは塙で覆われていて、そこは本来アメリカ軍関係者のみが入場を許可されていた場所であった。しかし、その塙の一部の箇所には人一人がちょうど通れるくらいの穴が開いていて¹⁶、Cはおぼに誘われて10名ほどの大人とともに基地内に入るのに同伴したことがあった。そして、そこで待っていた占領軍からチョコレートなどの菓子類を貰ったという。また、そのように彼らは占領軍に親切にしてもらっていたとはいえ、日本人は入った場所から先に進むことはできなかったし、むしろ先に進んだらどうなるかわからないという不安があったという。

次に、後者の経験についてである。まず、なぜ彼女が占領軍関係者のみを対象とするバーに入ることができたのかは、彼女の母親の知り合いが「バンバン」であったことに由来する。Cがどの

ような経緯でこのバーの存在を知ったのかは定かではない¹⁷が、その「バンバン」の女性にどうしてもプロレスが見たいのだと頼み込んで、お忍びで入店させてもらうことができた。そこで見たプロレスはとてもきらびやかに彼女の目には映った。

次に森井の経験についてである。森井の経験は、主に占領期に入ってきた欧米諸国の文化に対する憧れとともに記憶されていた。例えば、アメリカ軍のシンボルマークが統一的に刺繍されたスカジャンのかっこよさ、イタリア料理店で食べた<ピッツァ>のおいしかった記憶、蛍池駅の近くにあった社交ダンスの教室への羨望などである。また、彼が特に強調していたのがオートバイに関する記憶である。占領軍の兵士たちが乗っていたオートバイのかっこよさに憧れ、彼らのオートバイの整備を担当していた日本人の店に実際に見に行ったこともあったという。このように、森井は占領期の経験を明るくいイメージと共に覚えていたが、現在の大阪大学豊中キャンパス正門の付近に捨てられていた軍用機の残骸の中から、ガラスやベアリングで遊んでいたときにMPに追い回された経験については恥じらいの表情を浮かべながら語っていた。

このように、聞き取りのなかで語られるItami Air Base周辺地域の生活に関する記憶には、前向きなイメージが多く見受けられた。特に、森井の場合は占領軍に対する恐怖や不安といった感情には言及せず、むしろそのような感情はあまりなかったと語っていた。また、例えば、占領期に豊中高校で発行されていた『E.S.S Times』¹⁸では、当時の豊中高校の生徒がアメリカ軍ハウスに夕食に招待されたり、その家庭の子供たちと遊んだりしたという記事もあり、そこでのアメリカ軍と彼らとの交流は比較的友好的なものであったとも考えられる。

一方で、Cはアメリカ軍ハウスでベビーシッターとして働いていたことがあったが、その赤ん坊の父親から性的な発言を受けてその仕事を辞めたという経験を静かに語った。また、D(男性、1944年生まれ)は、1950年頃、知り合いの20歳

の女子学生が阪急豊中駅付近のあぜ道でアメリカ兵に後ろから襲われそうになり、持っていた傘で相手の顔を突き刺して逃げ帰って来たという場面に立ち会った²⁾。Dが「このことに関しては今までほとんど話したことがない」と言うように、特にこのような被害の声の多くは、当事者たちの沈黙をもって「語られない記憶」として忘却されていくのではないだろうか。

Itami Air Base周辺地域に住んでいた人々の記憶の語りからは、公的な文書には残らない人々の生々しい生活の様相が細部まで浮かび上がる。その記憶は各々がそのときに抱いた感情やその後になされた考察とともに表出する。そしてこうした語りにも前向きなイメージが伴うことが多いなか、突如「語られてこなかった記憶」が表れることがある。聞き取りという方法は「語られてこなかった記憶」に差し迫り、それを打開する切り口となるという点で、占領期、そしてその後も継続する「アメリカ軍がいた時代」を問い直すための有効な手段となることが考えられる。

以上、本章では1945年から1958年の間のItami Air Base周辺地域を知る人々への聞き取りを中心に、彼らが記憶するアメリカ兵との接触やアメリカ文化との出会いについて叙述し、それらが憧れなどポジティブな感情を伴って語られる傾向にあったことを示した。一方で、性被害などの「語られない記憶」「語られてこなかった記憶」を手繰り寄せることにも意義のある作業であることを確認した。

おわりに

ここまで、占領下における大阪国際空港周辺地域の様相について各章で論じてきた。

まず第1章では、1948年から58年までの間、現在の大阪大学刀根山寮のある場所に建設された占領軍将校の家族用住宅（ディペンデントハウス）に関する人々の記憶を追うことで、文献資料がほとんど残されていないこの施設群の実態を明らかにした。また、朝鮮戦争勃発に伴い、その

前線基地としてItami Air Baseが使用されることで、基地周辺には緊迫した空気が流れていた。その当時の様子を、吹田事件を中心に論じた。さらに、「進駐軍事見舞金支給申請書綴」に記載されている事故現場を地図化することにより、事故発生現場がItami Air Base周辺と産業道路沿いに広がっていることを明らかにし、朝鮮戦争勃発以降は占領軍の動線が拡大した可能性を示唆した。

第2章では「基地の子」に関する文献資料を中心に、Itami Air Base周辺地域の人々の生活史の様相についてふれた。当時の「豊中市政だより」に掲載された女兒の感想文からは、トネヤマ・スクールにおける日米児童の交歓会の様子が明らかになるとともに、建物の外観や内部についても一部知ることができた。次に、「パンパンハウス」を営んでいた男児の作文、1953年の蛍池小学校PTAの調査、そして筆者らによる聞き取りを手掛かりに、「パンパン」や「パンパンハウス」が基地の子にとって身近な場所にあったことを確認した。そしてそれが当時風紀問題という文脈のなかで問題化されていたことを示した。最後に、アメリカ軍の軍用機の離着陸に対し法整備や建物の工事が進められるまでには、学校現場から子どもやPTAの切実な被害の声の高まりが背景にあったことをみえてきた。

第3章では、聞き取り調査をもとに、まず個人の人々の具体的な経験を記述した。今回の聞き取り調査では、アメリカ軍やアメリカ文化に対して比較的正面的なイメージと共に記憶が語られたという傾向を示した。また、アメリカ軍からの性暴力被害などは多くの場合当事者にとって語りがたい問題である一方で、聞き取り調査こそがそのような「語られてこなかった記憶」へのアプローチを可能にする場合があることを提示した。ここまで述べてきた議論にはまだまだ不十分な箇所があるが、本共同研究で一応の到達点を示すものとし、むしろここでの空白を今後の研究課題としたい。

図表



図1：大阪国際空港周辺地域の地図
米軍航空写真（1948年3月撮影）を基に筆者作成

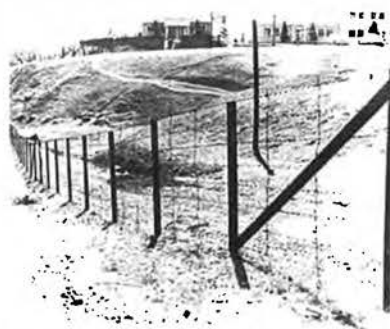


図2：刀根山ハウスと鉄条網 『大阪大学の50年：写真集』：85



図3：刀根山ハウスと大阪大学女学生『大阪大学の50年：写真集』：85



図4：Aの姉が描いた刀根山ハウス
『清酒発祥の地 兵庫県伊丹市』「2009 年年頭雑感」
http://aranishi.hobby-web.net/3web_ara/nenga21_1.htm#ojh より (2018年7月10日最終閲覧)



図5：吹田事件で石橋駅に集結した学生 『大阪大学 50年史』：277



図6：進駐軍事故現場地図

国土院発行「大阪西北部」(1951年、5万分の1)を基に筆者作成

注

¹ 本論文は、平成29年度大阪大学未来基金「学部学生による自主研究奨励事業」での成果をもとにまとめたものである。関係者各位に改めて御礼申し上げたい。

² A に対しておこなった電子メールでの調査による(2017年7月7日)。

³ B に対しておこなった電子メールでの調査による(2018年4月6日)。

⁴ 2017年8月29日のO.Yへの聞き取り(他多数)から。

⁵ 2017年10月12日の山田への聞き取りから。

⁶ A に対しておこなった電子メールでの調査による。

⁷ 地番対照表の紛失や地番の書き間違いなどにより、詳細な場所が不明なものについては、代表的な住所にマッピングを施している。なお、地番調査においては、豊中・池田両市役所の方々にお世話になった。

⁸ 刀根山地区について、「政府が地主から93200余坪の山林を借り上げ、ここに「刀根山ハウス」で知られる米軍士官家族用住宅やアメリカン・スクールが構築された」『新修豊中市史』第2巻：629、「刀根山ハウスは昭和21年8月、基地勤務者の宿舎として調達局が地主44人から借り上げ、終戦処理費のなから米軍住宅48棟・アメリカンスクール・米軍消防署などを

建設したもの」『豊中市史』第4巻：388』との記述あり。

⁹ 「昭和33年度 刀根山宿舎所管換書類」(大阪大学所管)より。

¹⁰ 2017年10月12日のY.Kへの聞き取りから。

¹¹ 2017年8月29日のO.Yへの聞き取りから。

¹² 2017年8月29日のO.Yへの聞き取りから。

¹³ 2018年5月6日のM.Kへの聞き取りから。

¹⁴ 2018年4月2日の南山への聞き取りから。

¹⁵ 2018年4月18日の森井への聞き取り、2017年9月12日のCへの聞き取りから。

¹⁶ このことに関する記憶は森井も話していたのであるが、そこを抜けると広いグラウンドが広がっていたそうである。その先に入っていくとはしなかったとのことであった。

¹⁷ 当時、プロレス選手が入店しているバーがあると噂にはあったようである。これは、占領期に子どもだった人々の記憶にあった。

¹⁸ 「米人家庭日記記 “like and love”」『E.S.S.Times』(大阪府立豊中高等学校英語研究会)1949年7月4日

¹⁹ 2018年9月28日のDへの聞き取りから。

参考文献

- 池田市史編纂委員会編 2009『新修池田市史 第3巻 近代編』池田市
- 伊丹市史編纂専門委員会編 1972『伊丹市史 第3巻』伊丹市
- 伊丹市博物館編 2009『大阪国際空港開港 70周年記念：空港と歩んだ70年』伊丹市立博物館
- 猪俣浩三, 木村禰八郎, 清水幾太郎 1953『基地日本』和光社
- 大阪軍事基地反対懇談会事務局, 関西軍事基地反対連絡協議会事務局共編 1954『立ち上る! 基地京阪神: 原・水爆基地を日本からとりはらえ!』同事務局
- 大阪社会福祉協議会 2009『鳩の街“蛍ヶ池”と基地の子ら』『大阪社会福祉研究』第4巻5・6合併号
- 大阪大学 50年史編集実行委員会編 1983『大阪大学 50年史 通史』大阪大学
- 大阪大学 50年史編集実行委員会写真集小委員会編 1981『大阪大学の50年: 写真集』大阪大学
- 大阪平和を守る会豊中支部連合会 1963『闘いの炎を燃やせ: 伊丹空港拡張と軍事使用反対のために』大阪平和を守る会豊中支部連合会
- 小泉和子, 高藤昭, 内田青蔵 1999『占領軍住宅の記録<上>日本の生活スタイルの原点となったデペンデントハウス』住まいの図書館出版局
- 佐藤洋一 2006『図説 占領下の東京』河出書房新社
- 清水幾太郎, 宮原誠一, 上田庄三郎編 1953『基地の子: この事実をどう考えたらよいか』光文社
- 田中雅一 2011『コンタクト・ゾーンとしての占領期ニッポン: 『基地の女たち』をめぐる』『コンタクト・ゾーン』第4号
- ダワー, ジョン 2004『敗北を抱きしめて: 第二次大戦後の日本人(上・下)』岩波書店
- 茶園敬美 2014『パンパンとは誰なのか: キャッチという占領期の性暴力とGIとの親密性』インパクト出版会
- 豊中市史編さん委員会編 2010『新修豊中市史 第2巻 通史2』豊中市
- 西川祐子 2017『古都の占領』平凡社
- 朴沙羅 2010『<事実>をつくる: 吹田事件と言説の政治』『ソシオロジ』第54巻3号
- 平井和子 2014『日本占領とジェンダー』有志舎
- 松原宏之 2014『兵士の性欲, 国民の矜持: 20世紀初頭アメリカにおける市民の資質をめぐる』『慰安婦問題を／から考える: 軍事性暴力と日常生活』岩波書店
- 松本裕行 2016『占領期における大阪の接収不動産についての調査』『空間・社会・地理思想』第19号
- 本井優太郎 2015『戦後地域社会における基地問題の生成と展開: 伊丹航空 基地とその周辺地域を事例に』『待兼山論叢 史学篇』第49号
- 『私たちの学生時代』を発行する会編 1999『神戸女学院のものがたり: 専門学校最後の卒業生が巣立って50年』『私たちの学生時代』を発行する会

(新聞記事等)

- 『米人家庭訪問記“like and love”』『E.S.S.Times』(大阪府立豊中高等学校英語研究会) 1949年7月4日
- 『日米交歓: トネヤマ・スクール訪問』『豊中市政だより』1954年2月5日